

ドイツ歌曲の日本語歌詞に関する研究 教科書教材の邦訳について

Research on Japanese lyrics of German songs.
Japanese translation of textbook materials

飯泉琴都(武蔵野音楽大学研修員)
Koto IIZUMI (Trainee of Musashino Academia Musicae)
(キーワード)

歌詞、高等学校音楽科教科書、日本語訳詞、ドイツ歌曲

はじめに

高等学校の音楽の教科書に取り上げられている外国の歌曲は、時代や版によって同一曲に異なる日本語歌詞がつけられている事が多い。これらは実際に教材として取り扱った場合、生徒たちは、その偶然出会った日本語歌詞を歌う事になる。これは本来、外国語の歌であると考え、歌う事から生まれる音の響きととらえた場合、一教材としてその日本語の歌詞の響きも検討する必要があるのではないかと考えた。

そもそも歌曲は、原語で歌う事が最もメロディーとマッチングすると思われる。これは、歌詞に合うメロディーがつけられている、または、メロディーに合う歌詞がつけられている事だからである。特にドイツ歌曲などの芸術歌曲は、その歌詞と音楽の芸術性を追求しなければならないものだと考えられる。

そこで、本研究では、実際に教育現場で使われている教科書教材の日本語歌詞について研究した。

楽曲は、高等学校の教科書教材として取り上げられている、メンデルスゾーン作曲の《歌の翼に》を取り上げて研究し、ハイネの歌詞と4名の日本人作詞家の歌詞の母音に着目し、分析を行った。本作品において取り上げた日本人作詞家は、津川主一、門馬直衛、

久野静夫、林望の4名である。

研究方法

- ・ハイネと日本人作詞家4名の歌詞を実際に演奏し、母音について確認をする。
- ・1フレーズごとに、5つの歌詞の母音を取り上げ、母音の表を作成し照らし合わせる。

研究の結果

ハイネの詩と4名の作詞家の詩は、共通する部分もあれば、異なった部分もあった。これは言語の違いによる母音の仕組みが異なるため、この結果は、ある程度予想していた。しかし、ドイツ歌曲のような芸術歌曲を表現する場合、その織りなすサウンドの響きの再現が重要なのではないかと考えられることを先に述べた。そうすると、もし日本語の歌詞で歌う場合、いかにしてドイツ語歌詞で歌ったときのサウンドに近づけるかという事が高等学校の芸術科音楽を学ぶ上では重要なのではないかと、この点の課題が残った。

また、今回取り上げた4名の歌詞の中で、津川と門馬の歌詞は、古い日本語の歌詞が用いられている事が分かった。21世紀に生きる高校生が歌うものと考え、その歌詞の内容は分かりにくいのではないかとこの事も分かった。そのため、日本語の歌詞は、時代とともに変化させていく必要があるのではないかとこの事も、次の課題として残った。